

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 227 載

奥深い絵本の世界

必要に迫られて、絵本を何冊か読む機会を得た。改めて、絵本のことを色々調べてみると、はじめて知ったことが意外に多いことに気づく。

絵本の選定について詳しい人に聞いてみたところ、松岡享子さんという方の本を紹介された。絵本にはほとんど縁がなかったため、松岡さんのお名前も初めて知ったわけだが、こんな女性がいたのだというちょっとした感動を味わっている。松岡さんは、1935年生まれ。神戸や東京の大学を卒業後、アメリカの大学院で児童図書館学（こんな学科があるのも知らなかった）を専攻、

帰国後自宅で家庭文庫を開く。1974年に同志と東京子ども図書館を設立、長年児童文学の翻訳や創作、研究を続けてきた方だ。

現在、本屋に並ぶ絵本は膨大だ。何を選んでも面白そうだが、何を選んでもいいのかわからない。そこで、松岡さんが推奨する絵本リストを参考にすることにした。リストに並ぶ本のタイトルは、ほとんどなじみがない。昔読んだり知っていたりするものはほんの少し。あとははじめて目にするものばかり。本好きを自称してきた私だが、絵本の世界はまた別なのだと思えることとなる。

松岡さんによれば、いい絵本は「満25歳以上」であるのが望ましいという。つまり、歴史を持つていることが大前提となる。したがって私が生まれるずっと前に出版された本もたくさんある。例えば「ピーターラビットのおはなし」は、190

が当たり前ではなく、白黒の映画もまた味わい深いということに似ている。古典ともいえるべきこれらの絵本の中には、表現方法が誤解されるという理由で出版そのものにストップのかかったものがある。先の「ちびくろ・さんぼ」や「シナの5にんきょうだい」



2年に原書の初版が出た。「ちびくろ・さんぼ」は1900年「ペレのあたらしいふく」は1910年である。絵本というところからカラフルな色付きばかりかと思いきや、墨一色があつたり黄色でアクセントをつけただけ、というのもある。カラー映画

騒動に記憶がある。何が差別なのか当時の私にはわからなかった。トラたちがバターになるのはいけないのかなと、まったく筋違いのことを思い、子どもながら残念に感じたものだ。（ちなみに、両方とも今は出版されている）

改めて今回目を通して、その面白さや斬新さにびっくりした。特に「シナの5にんきょうだい」は、ストーリー性があり展開が読めず楽しく、そしてスカッとする。どちらの絵本も、差別云々を乗り越え、力強く歴史に刻まれ、今も多くの子どもたちに素直な驚きと感動を与え続けている。松岡さんは語る。「幼い子どもが最初にふれる本は、人生に対して肯定的で、日なたのあたたかさや備えていなければならぬ」と。この言葉の冒頭を「疲れた大人たちが欲している本は」と変えてみると、現代人にとってもまた絵本がかけがえのない宝物であることに違いないことがわかる。若者の読書離れが進んでいると聞く。人生の大部分の楽しみをみずから放棄しているに等しい。思わず「もったいない」と嘆きたくなってしまう。

イラスト・伊藤香澄